

第286回くらしの植物苑観察会 令和5年1月28日(土)

「くらしの中に息づく植物—園芸植物の歴史—」

天野 誠(千葉県立中央博物館 植物学研究科 上席研究員)

はじめに

植物園芸植物とは、何でしょうか？主に鑑賞を目的とする植物(鑑賞植物)と日本ではほぼ同義です。英語の Horticulture という単語には、菜園で栽培される野菜やハーブの栽培も含まれています。

最初は、野生の植物(原種)が、そのまま栽培されていたと思われませんが、ある時から品種改良が行われていて、多彩な特徴を持つ品種が栽培されています。品種改良の方法には、野外から鑑賞価値のある個体を選抜する方法や栽培中に生じる枝変わりや新しい品種とする方法があります。積極的に育種の意図を持って、同種間で交配したり、種間交雑したりする方法もあります。日本は前者の方法が主流であり、欧米では後者の方法が主流です。

遊牧民族など、園芸植物に無縁な人々もいますが、日本は欧米とともに特に園芸が好きな民族のようです。江戸時代末期、園芸植物の収集のために日本の江戸郊外の園芸の村「染井」を尋ねたフォーチュンは、ずらりと並ぶ園芸店の植物も丸ごと買い取りたいという衝動に駆られたようです。それほど江戸の園芸のレベルは高かったのです。また、園芸植物が庶民にも浸透していて、家の前に数鉢の園芸植物が並んでいるのに感心していました。

前半は、日本の園芸植物の特徴と改良の歴史、後半は個々の植物の日本で導入、品種改良の歴史を紹介いたします。

園芸植物の歴史

日本でいつから園芸植物が栽培されるようになったのかは定かではありません。平安時代初期の百科事典「和名類聚鈔」には、牡丹が掲載されています。「枕草子」の64段には、セキチク(牡丹)のことが、143段ではボタンのことが述べられています。平安時代中期には、すでに中国原産の園芸植物が貴族階級では鑑賞されていました。一方、「草合わせ」のように野生の美しい花を集めて、競う風習もありました。

日本特有の園芸文化は、江戸時代に花開きました。徳川2代将軍秀忠は、ツバキを好み吹上御所にツバキの花壺を作りました。江戸時代前期、元禄八年に「花壇地錦抄」という園芸書が出版されています。著者の伊藤伊兵衛は、今で言う植木屋のような人で、庭の手入れをするとともに庭木の植え込みもしました。その内容は、先述のツバキの他に、ボタン、ツツジ、サクラ、ウメ、カエデなどの花木を主体として、中国や日本原産の様々な多年草が取り上げられています。もうこの時代に多数の園芸品種が生まれ、そのことを知りたい園芸人口がいたこととなります。



ボタン

江戸時代後期、文化・文政の時代になると、日本の園芸は最盛期を迎え、様々な多年草が改良されるようになりました。ハナショウブは、松平菖翁によって改良され、今もその品種が栽培されています。ハナショウブの改良はさらに続けられ、堀切菖蒲園は、花の名所として知られ、歌川広重の「江戸名所百景」にも取り上げられています。

変化咲朝顔は、日本特有の趣味を表す植物で、花の色はもちろん、花の奇形や葉の奇形を楽しむものであり、種子のできない獅子咲き牡丹などの出物と呼ばれる鑑賞品を得るためには、潜性遺伝子（劣性遺伝子）を持つ兄弟の系統を維持しなくてはなりません。栽培には非常に高度な知識と手間が必要です。

この時代に盛んに栽培された古典園芸植物の代表にオモト（万年青）があります。文政10年に種樹家金太の書いた「草木奇品家雅見」は当時のオモトの品種を分類して、記述したものです。オモトは、その後も流行を重ね、希少価値の高い品種は高値で取引されました。オモトは錦出の植木鉢に植えられ、観賞されました。鉢植えの文化は、日本の園芸の特徴でもあります。

江戸時代、長崎を通じて、チューリップ（鬱金香）、ダリア（天竺牡丹）、ヒマワリ（向日葵）などの西洋の園芸植物が導入され、広く栽培されることはなかったものの、記録に残りました。

明治時代になると、欧米から様々な有用植物が、政府の手で導入され、各県に種苗が配られ、地方の篤農家が栽培に努めました。現在の果樹の産地の大本がここに由来する場合も多いのです。

鑑賞用の植物も次々導入され、現在栽培されている外国産の園芸植物の多くが出そろいました。セイヨウバラは、様々な種の交配によって作られましたが、明治時代にハイブリッド・パーペチュアルの品種が輸入され、日本の名前が付いて、通信販売されていました。その後、主に高心剣弁で、四季咲きのハイブリッド・ティーの品種も輸入され、切り花の形でのコンテストが行われるようになりました。その頃のバラは、病気に弱く、絶えず農薬散布しないと満足に花を咲かせることもできませんでした。



セイヨウバラ

昭和時代の末あたりから、今まで導入されてこなかったり、定着しなかったりした園芸植物が大手種苗会社のカタログに掲載されるようになりました。これらの植物は趣味的に栽培されていましたが、多くの人に名を知られるようになったものもあります。グロリオサやサンダーソニアは、むしろ切り花として有名になりました。国営ひたち海浜公園のネモフィラの丘で有名になったネモフィラや皇帝ダリアもこのような部類に属する植物です。園芸植物の歴史を辿ると日本の独自性が垣間見られ、興味が尽きません。

.....

次回予告 第287回くらしの植物苑観察会 令和5年2月25日（土）

「西洋草花模様の着物」

澤田 和人（当館 情報資料研究系 准教授）

13:30～15:30 苑内休憩所集合 申込不要 定員20名